目次

続編：序文 ―― わたしの想い！……5
第1章 プロローグ……13
第2章 「強い人が大関になる。宿命ある人が横綱になる」……31
第3章 型（かた）をもって、型にこだわらない！……43
第4章 もとより その覚悟です！……63
第5章 記録更新が止まらない！……79
第6章 右膝 ―― 骨折……93
第7章 勝ちに行く意欲が萎（な）えたら、土俵を去ります！……103
第8章 平成～令和を征（ゆ）く決意……119
第9章 白鵬翔〝モンゴルへの思い〟……135
第10章 若手台頭＝横綱の休場埋めた〝小兵〟……177

第11章　エネルギーの源泉――〝孤独なひとり旅〟……193
第12章　果てしない〝旅路〟……209
第13章　㈱白鵬翔とのショートメール……237

続編：序文 ――わたしの想い！

「Olympic終わったら、引退します。いつもありがとうございました。白鵬翔」（２０２１年7月20日、15時49分）

大相撲名古屋場所、全勝で45回目の優勝、千秋楽から3日目のメールです。「惜しまれて退くとは、どういうことか。よくよく心に刻んでください」と進言してきた私は、全身の震えが止まりませんでした。

２０２０年、年の瀬の28日、年賀代わりの横綱からのメールに「絶好調です。稽古が楽しい」とありました。初場所にかける並々ならぬ思いが感じられ、休場続きの暗い環境から抜け出す自信がみなぎっていました。両膝の大手術（２０２０年8月16日）を克服して、もう一度、土俵に雄姿を見せる〝不死鳥の男〟に秘かな期待感が溢れました。

その矢先、年明け（２０２１年）正月5日、「白鵬、ＰＣＲ検査で陽性。即入院」の報道にことばを失いました。コロナウイルスに再起を邪魔されるとは、「神も仏のないものか」とへたり込みました。白鵬自身、どれほど無念の思いに駆られていることか、察して余りあります。

わたしは、3月場所の横綱はコロナから復帰して、絶好調の延長線上にあると思い込んで

いました。

初日、2目目と順調に白星を重ね、取組の解説をお願いしている「大相撲ＴＶ中継」草分けのＮＨＫ名アナウンサー、杉山邦博プロも太鼓判を押してくれました。ですから、3日目の休場届に唖然としました。ところが、場所の直前、「準備は万全ですか」という問いに「膝にちょっと水がありまして……なんとか頑張ります」（3月2日）というメールを思い出し、右膝軟骨の損傷と関節水腫の障害は生易しいものではないことを察知しました。白鵬の怪我の容態を知り尽くしている主治医の先生が、場所前から泊まり込みで付き添っていたことを知り、3日目から休場した理由がわかりました。だから横綱が5月場所を休み、横審からの「注意」（事実上の引退勧告）に対して、「7月場所に進退をかける」と返答したことに合点がいきました。『広辞苑』によりますと、「進退」とは「すすむこととしりぞくこと」とありますが、同時に「自らの責任を上司に仰ぐこと」と説明されており、通常は退くことを前提としています。

7月場所（２０２１年）の土俵は白星の数よりも15日間全うして引退できれば、以って瞑すべしと思っておりました。故障が奇跡的に癒えて優勝力士のインタビューを聞く夢のような空想を払いのけながら見守りました。ところが、常識では測れない超人の土俵は連日相手を寄せ付けません。全盛期よりどっしりと安定して、呆れるほど強い。10日目を過ぎると右

膝に水がたまって足が動かなくなるパターンを克服して勝ち進む横綱をオーラが包んでいます。45回目の優勝の夢がまさか〝正夢〟になるとは、想ってもみませんでした。アメリカのプロ野球で、「野球の神さまベーブ・ルースに匹敵する」と評価されているエンゼルスの大谷翔平選手を連想して、名前が同じ「翔」だと思いながら、「相撲の神さま・双葉山に匹敵する」としか言いようがありません。まさに7月、名古屋場所は「Show Time（翔タイム）」でした。

全勝優勝で引退は最高の花道ですが、やはり次の9月場所で新横綱に敗れて、「壁の役目」を卒業したら、引退を勧めようと考えていた矢先でした。引退を告げるメールが届き、〝真の勝負師〟の凄みに肝をつぶしました。「オリンピック終了とともに引退」の特ダネを教えてあげたい相撲担当記者がＮＨＫ、朝日新聞、毎日新聞にいますが、こればかりはご勘弁いただきます。

3年前に亡くなった父親と交わした「東京オリンピックまでは頑張る」という約束が、白鵬翔に決断させたのでしょうか。

お相撲のことはシロウトです。たまたま、白鵬翔夫人・和田紗代子さんの父・和田友良氏と懇意な間柄が縁となって、横綱の〝心の相談役〟となったのが、事の始まりでした。門外

漢であったのが、却ってよかったのか、古代中国で遠慮なく皇帝に苦言を呈した「諫議大夫」の諫言を横綱がよく受け止めてくれました。

白鵬翔は、２００１（平成13）年3月、初土俵。２００７（平成19）年7月、第69代横綱に昇進。朝青龍が引退した後は、〝ひとり横綱〟として大相撲を支え、今日まで14年間横綱に在位。２０１７（平成29）年には通算勝利最多記録を更新し、優勝45回の記録と合わせて、おそらく、将来、誰も乗り越えられない不世出の横綱です。

ひとりの並はずれた力量のアスリートの生き様を通じて、人の生き様を追い求めるエッセイを残す機会に恵まれました。一筋に生き抜こうとする男の心技の機微に触れて、いささかの所信を語ることが許され、とても幸せでした。

続編を執筆したのは、土俵人生の正念場を迎えて、怪我と闘いながら自らの責めを果たそうと苦しむ横綱の赤裸々な胸の内を伝える責任が、私にはあると自覚したからです。この上は、土俵の横綱にお寄せいただいた読者の皆様方の声援を、近く実現する年寄・間垣親方に賜りますようお願いいたします。白鵬＝間垣親方は、相撲道を尊重し、力士を人間として大切に育てる決意と承知しています。

最後にひと言、悪い癖！　オリンピックの開会式で、横綱の土俵入りを世界に発信して、「日本の伝統文化」を誇るセンスがＪＯＣにあると素晴らしかったのですが……。

読者の皆さまにご報告がございます。

わたしが主宰する一般社団法人「安保政策研究会」の故・宇治敏彦理事は、東京新聞論説主幹として健筆をふるったジャーナリストでした。趣味で「万葉版画」に挑み、独特の作風を確立した才人です。また、大学1年生の折から60年余のお付き合いをいただいてきた安保政策研究会・熊谷一雄オブザーバーは、晩年、一念発起して水彩画を楽しんでいます。無理をお願いして作品を掲載させていただきました。

なお、ご了解たまわりたいのは、本書に登場する方の多くの場合、尊称を略させていただいております。社会的地位が高く実績のある方々を軽んずる意図は全くございません。親しみやすく読んでいただくためでございます。

末尾になりましたが、改訂版『白鵬翔とのショートメール』をご購読いただいた皆さまに幾重にも感謝申し上げます。まことに光栄に存じております。ありがとうございました。

（2021年7月25日、名古屋場所千秋楽から1週間。横浜・青葉区の自宅作業場にて）

「萬葉版画」（宇治敏彦　作）